

ハイデルベルク信仰問答より

問 83 鍵の役目とは、何ですか。

答え それは、聖なる福音の説教とキリスト教の戒規であります。これら二つの方法によって、天国は信ずる者に開かれ、信じない者には閉ざされるのであります。

「鍵の役目」とは、もちろん礼拝堂の入り口の戸締まりのことではありません。前回の表現を引用するならば、「教会は罪を見極め聖なるキリストのからだにそれを残さない責任を負っている」ということです。

信者の実際の信仰生活において、自ら罪を告白する事例はどれくらいあるのでしょうか。もしそれが適確になされているのであれば、その教会はへりくだった群れだと言えるでしょう。

過去に日本福音同盟の総会に出席した際に、ある団体の代表者は処分の対象になった牧師の罪を黙秘し続けましたが、それに対して別の団体の代表者は悲しみながらありのままを告白しているのを見ました。おそらく、後者の団体の方がその後の回復は早かったことでしょう。同様に、個人の信仰生活においても、罪の告白ができる人の方が早く主に立ち返ることができるはずです。

「答え」の中で、「鍵の役目」を果たすものとして「聖なる福音の説教」と「キリスト教の戒規」という二つの要素が挙げられています。この順序の意味するところは重要であり、教会は戒規の執行に先立って御言葉により人の罪を心に示していくべきことが示されています。しかし、それは当てつけ的になされるものではなく、聖書全体を説き明かしていくときに必ず直面する「罪の問題」を扱うにすぎません。その御言葉の説き明かしを聞くまでは、罪を罪とさえ思っていないこともあるでしょう。自分の言行によってどんなに主が悲しまれたかが心に示されたとき、人は罪の告白と悔い改めへと促されるのです。

前回と重複しますが、戒規の執行というのは基本的に、罪が明らかになってきているにも拘らず開き直っている者、罪深い生活を改めようとしめない者に対して、やむを得ず執行するものです。それは当事者に罪を認識させるために行なわれるべきものであり、その人を教会から締め出すためになされるものではありません。陪餐停止は、一時的に「主の晩餐」にあずかれない状態を経験することにより、神の民の外側にいる感覚を知ることになります。その耐え難い状態（救われている人であるならば耐え難く感じるはず）から回復したいと願う心が起こされるために、戒規は執行されるのです。

戒規を執行するか否かを決定するのは教会であります。それは個人の主観でなされるものではなく、事実確認と教会規則に則った判断が必要です。そして、その判断は御言葉に基づいて、その人が神の憎まれることを行なっているかどうかを見極めるところにあるでしょう。神の民であるなら留まり続けてはいけない状態があるのです。

肉の行いは明白です。淫行、汚れ、放蕩、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、妬み、泥酔、馬鹿騒ぎ、その他このたぐいのもので、以前も言ったように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはありません。

(ガラテヤ 5:19-21)

繰り返しになりますが、御言葉が語られることによって自ら罪の告白へと導かれるのが望ましいのであって、戒規の執行はやむを得ぬ教会の判断となります。「天国は信ずる者に開かれ、信じない者には閉ざされる」とあるように、「聖なる福音の説教」にも「キリスト教の戒規」にも心を閉ざす人は、自ら天国の戸の外に立ち続けることとなります。聖霊がその人の内におられるなら、御言葉と戒規を通して罪を示す聖霊の呼びかけに応じていくはずで